

加し、戦車第六旅団は戦車第十三連隊、第十七連隊の主力をもって、七月から湘桂作戦に参加、終戦時、戦車旅団は湘桂作戦を終了して北京へ移動中で、師団は北京地区にあった。既にその時点で張家口付近にはソ連軍が南下しつつあった。

そして八月十八日頃「軽拳妄動を慎むように」との中隊長の訓示があり、皆呆然自失、解放感と無力感に魂の抜けたようになった、と終戦の衝撃を語る。また『北京へ集合の命令で貨車に積める物は積み、自動貨車の大部分は黄河の支流の河岸に整列させて別れを告げた。生死を共にし、受領してからエンジンも足回りも修理に修理を重ねた愛車を置いて行くのは辛い思いであった』と哀感をも語っている。

徴兵検査より復員まで

神奈川県 高橋悦二郎

「第一乙種合格」昭和十五（一九四〇）年、横浜で行われた徴兵検査場にて徴兵官よりこう宣告された。続いて「貴様の希望兵種は何か」と言われ耳を疑ったが、即座に口から「通信兵」と言う言葉が出た。それは私が私立の無線通信学校で通信技術を修得していたからにほかならない。しかし甲種合格でなく、第一乙種だからと兵役には関係ないと思っていたが、確か昭和十五年の秋頃、横浜連隊区より、「昭和十五年十二月一日、北支那派遣電信第十連隊へ入隊」との通知を受領し、同年十一月の末、近隣の方々に送られ集合地の横浜駅に向かった。

同駅には各地より集まった新兵と憲兵が多数いて、物々しい雰囲気があった。点呼後、列車に乗車、窓は錠戸が下され、外は見えず、ただ列車は

西に向けて走るのである。我々は周りの者と小声で出身地とか業種を聞く。栃木県、群馬県、東京市の者がほとんどである。

車窓に寄り掛り、いろいろのことを考えている内に、いつしか眠くなりウトウトしていると、急に大声で「皆聞け、この列車は広島に向け走っている。お前等は広島で降りる。そこで軍装品受領、私物は一切お前等の家へ送り返す。分かったか」と念を押された。

翌朝、目的地の広島に到着。広島電信第二連隊か兵站か分からないが、禰からシャツに至るまで受領し、着替え、三八式歩兵銃、ゴボー剣も渡され、どうにか兵隊らしい格好が出来上がった。着替えたものは国防婦人会の手により家へ送付方をお願いして、小休止後、陸軍少尉に引率されて宇品へと行軍する。沿道には愛国、国防婦人会や小学生、中学生達が日の丸の小旗を振って送ってくれる。

やがて宇品に着き乗船前の大休止の間に各人一

つ星の軍服姿を撮るため街の写真館へと走る。夕刻、我々は「国津丸」という貨物船の船底に押し込められる。便所は舷側より張り出され、下を見れば荒波である。灯ともす頃甲板に上がる。船は静かに走り、瀬戸の灯がきれいだった。

下関を通過した頃船内放送で「今から用便の他、甲板に出ることを禁ず」という。船底の丸窓から外を覗いた者が「おーい、朝鮮だぞ」と叫んだ。見れば禿山（禿山）で木が無く、うら淋しい風景である。やがて船が海に漂う木の葉のように揺れ出し、船底の我々は左右にゴロゴロと転がり、アチコチで胃の中の物を吐き、その臭気が充満する。また呻き声がまるで地獄絵の様で船酔いでフラフラして甲板を這いながら便所に通う姿は哀れであった。そのような大揺れの中でも炊事当番は、飯上げの食缶をヨロヨロしながら勤務する。しかしそんな思いをして運んできても誰も食う者がいない。胃の中は空っぽ、吐くのは胃液か血のみ。全員全く青菜に塩といった状態である。

そのような日々が続く、ある夜船は港に入った。目的の支那大陸に到着したのか皆ほっとした様だ。翌朝暗いうちに下船、波止場に整列、指示を待つ。やがて指揮官より「現在地は北支那の港、漕沽」と知らされる。足元の大地は凍りつき肌を刺す。点呼の後我々は隊列を組み行軍に移り、部隊のいる済南に向かう。時間の観念はなくなった。ただ歩くだけ。どれだけ歩いたのか前方に煉瓦造りの大きな建物が見えてきた。これが我々が入る電信第十連隊か、営門に着剣した兵隊がいる。そうだここは戦地なのだと思い胸ぶるいがする。

営門を通過して広い営庭に整列、連隊長の訓示を受け中隊編成となり、私は第一中隊第四班に編入と決まる。我等初年兵は全員で九十七人、関東の出身者ばかりで、それに古参兵は関西出身者ばかりである。初めて聞く関西弁が分からない。入隊して二、三日はお客さん扱いで、わいわいと親切に教えてくれたが、四日目から突然豹変し、ビンタビンタの毎日である。夜の点呼が一番凄く、

けが星一つの二等兵。四月末に一部を除き野戦電信第二十中隊へ転属。駐屯地は「麦と兵隊」で有名な徐州である。散々苛め抜かれた済南には悔しさだけが残る。その済南ともお別れである。同年兵は皆同じ思いだと思う。

駐屯地の徐州にはある期待を抱きつつ貨車に揺られて向かう。何時間か経って徐州に到着したが、我々が期待した徐州とは余りにも違う。そこは汚く黄塵の舞う薄暗い街だった。第二十中隊はその片隅に陣した。崩れかかった支那の家屋で、内部は壁も崩れ、内務班は板敷きアンペラである。中隊長は年配の島谷中尉で召集の将校である。中隊の中でただ一人の二等兵であった俺も、六月一日やっと星二つの一等兵になった。

我々の隊は、あの有名なノモンハンの生き残りの隊だと聞かされ驚いた。我々の知る限りでは「ソ連軍と戦い壊滅された」筈で、星二つの四年兵、五年兵が数人おり上等兵や兵長より威張っている。「メンコ」の数がもの言うところが軍隊だと思

声が小さいといつてはビンタ、銃の手入れが悪いと言つて各班回り、タイル敷きの廊下に水を撒き揮一つになり四つん這いである。真冬の北支、何で俺がこんな目にあわなければと泣けてくる毎日が続く。

同年兵の中にはこらえ切れず脱走する。一期の検閲までに九人に及んだ。その都度「非常呼集」で叩き起こされ、営外出動である。北支の野の酷寒が身にしみ、寒いより痛い。その上、八路军の「出没で危険この上もない。そして帰隊して待っているのはビンタの嵐。「お前等はたるんでいる。連帯責任だ」と。幸か不幸か急性虫起発病にて一月二十日済南陸軍病院へ入院を命ぜられる。痛い思いはあったがヤレヤレとの感が強かった。二月の末、退院、即日原隊復帰となり帰隊し、元の様な訓練の明け暮れとなった。

昭和十六年四月、我等が待ちに待った一期の検閲が無事に済み、俺を除いた全員が星二つの一等兵に進級した。途中入院したためとは言え、俺だ

う。俺は第一班に編入され、班長山崎軍曹の当番を命ぜられたが、日課は城外にある通信所、保線所の整備任務である。それも三日に一回というノンビリしたもので、他の日は近くのクリークへ駄馬で水汲みである。

しかし星二つになっても初年兵である。たまにビンタを貰うこともあるが、済南当時と違い楽になった。ある夜非常呼集のラッパが鳴り、全員中庭に集合する。隊長がいきなり抜刀して出動命令を伝える。「今夜、連隊より我が隊に出動が下令され、これより博山方面に侵入した敵共産八路军軍に対して我が第二十連隊はこの作戦に参加し、速やかに電信網を構成の任に当る。この作戦を博西作戦と称する。我が隊は明早朝集合地に向け出動する」と。我々は興奮し武者震いをする。初めての戦闘に参加出来るのだと思つたが、その後人事係よりの編成発表では、俺は残留となり、翌朝出動する部隊を見送る。悔しさを涙が止まらない。

留守隊のいる兵舎はがらんと心淋しい限り。

毎日つまらぬ日々を過ごしていたが、出動した部隊は思いのほか早く、一カ月位で全員真黒に日焼けして帰って来た。軍服も装具も汚れ果てていたが、負傷者も無く、全員無事の戦友を迎えて、お互いに抱き合い無事を祝いあった。夕食は鯛の尾頭付き赤飯に清酒付き、俺達残留組は戦場の模様を根掘り葉掘り聞くのに忙しい。

徐州の夏は酷暑の毎日だ。雨も降らず、黄塵は舞い、目も明けられぬ。週一回の野外演習では一面の麦畑、瓜畑の中を匍匐前進で草いきれと牛豚の糞の臭い、汗と泥にまみれクタクタなる。しかし夜は満天の星が輝き、空を見上げ故郷を思い出す。

夏も過ぎ十月の初めの夜「非常呼集」で起され、飛起きると「そのまま営庭へ集合」と連呼がある。外套を掴み飛び出すと、もう既に中隊幹部が集合しており、あわてて列に飛び込む。突然「気を付け、休め」の号令があり。中隊長の声は何か博西作戦の時とは違う雰囲気である。隊長は声を張り

ある日前方に軽機の発射音を聞く。いよいよ戦場へ到着だ。早速小隊長より命令あり「歩兵部隊の前方へ被覆線を延線、確保せよ」とあり、山崎分隊長と共に行動を開始し約一時間後に最前線に到着する。小隊長と分隊長は歩兵部隊の指揮官と打ち合わせに、我々はその間小休止で煙草に火を付け一服する。

気が付くと歩兵の連中が物珍しげに集まり、ワイワイがやがや、我々の便衣のためだ。やがて小隊長、分隊長が帰り、また行軍開始である。ある部落を通過中に中年の支那人に声を掛けられ、黙っている、今度は流暢な日本語が追いかけてくる。聞けば早稲田の文科出身で、この村の村長だとか。早く戦争が終われば日本へ行きたいともらしていた。

数時間後、通信網を構成し、クリークの土手で小休止中、友軍の重機の射撃を浴び、一瞬もう駄目かと思った。分隊長が慌てて合図の小旗を振り事なきを得たが危なかった。河北の山中で支那服

上げ命令を伝える。「我が中隊はこれより河北省中部に展開せる第十二軍の通信網構成のため、中隊一丸となり作戦に参加する旨下令あり。出動は夜明けとす。また一部の小隊は便衣にて行動する」と。

編成は直ちに発表され、俺は第一小隊に所属、被服係より作戦服を受領する。それは黒い支那服で便衣隊である。翌朝の〇四〇〇、営庭に集合。我が第一小隊は小隊長品田少尉以下四十五人である。全員支給された便衣を着用、武器は捕獲品のチェコ軽機一、騎兵銃と弾薬六十発、手榴弾三個のみで、通信機は一台と甚だお寒い整備である。また友軍からの誤射を避けるため目印の小旗が山崎軍曹に手渡された。

中隊長、小隊長、分隊長から、それぞれの訓示が終わり、まだ暗い〇四三〇、駄馬編成により出発、一路河北の戦線へ向かう。途中味方の部隊に会う度に冷やかされ苦笑する。夜は部落の麦藁の中で仮眠しつつ幾日か行軍した。

のまま友軍に撃たれ死んだでは死んでも死に切れないなあー、と皆で大笑いをする。数時間後便衣から正規の軍服に着替えて日本軍に戻った。

作戦終了後、西瀧海線の寒村、堪山に保線所の開設を命ぜられ、久保田兵長を長とし八人にて本隊より分離出発する。同年兵では小山一等兵と俺と二人のみ。他は三年兵、四年兵で自動貨車一台を支給され任地に向かう。堪山の部落はうらぶれた寒村で戸数も二十戸ばかり、到着して直ぐ村長に交渉し、一戸を得て早速保線所を開設する。日に一回自動貨車で保線区間の巡視、後は村の子供と遊ぶという繰り返しだ。

ある夜中、突然、定時の連絡が途絶えた。緊急事態発生、分隊長以下全員飛び起き自動貨車に分離して、受持区間に向かう。はるか前方に火の手があがっている。近づくにしたがい火の手は高くなって小銃の音も聞こえてくる。やっと現場へ到着、見れば半永久の電柱が切断され、積まれ、燃え盛っている。分隊携行の被覆線を延線するも

足りず、各自の小銃の銃身を握り、足りない線かわりとなるもアース棒が利かず、全員小便をして銃剣を大地に打ち込み、やっと本隊との連絡に成功し状況を説明する。

その間も絶えず近くの部落より、ヤン砲の音絶える間もない。野犬の声も一段と激しく、幸にも敵の攻撃も無く、応援に駆け付けた本隊に引き継ぎを完了し保線所に引き揚げた。

十一月十日頃、炊事係として使っていた苦力より情報が入る。それによると、この二十日頃敵の正規軍四万が西に向かってこの付近を通過するとか。俄然保線所は色めき立ち、早速本隊へその旨を打電し、今夜より全員で歩哨に立つ。二、三日後の夜半、キヤタピラの音が遠方より響いて来た。だんだん音が近くなってくる。このままだと我々分隊はと、苦力を偵察に出し報告を待つ。やがて苦力が帰り、報告によると保線所より三キロ位離れた位置を西方に、大部隊が通過中という。何時予先がと……全員玉砕を覚悟、寝もやらず夜

章があり、時々手で確かめるが未だに実感が沸かない。悔しい思い出がある済南へ一年振りで教育係助手として帰るのだ。俺は第一中隊第一班の班付きとなり、班長は山崎軍曹だ。班長は内地へ初年兵受領のため帰り、受入れ準備で毎日忙しい日々を送っていたが、宿敵ともいえる三年兵数人が初年兵係として着隊した。当然我々とは肌が合わない、何か衝突があるのは目に見えているのだ。十二月十日、山崎軍曹に引率され初年兵が到着した。各県混成で関東、関西、沖縄の出身者もあり、十六年兵が入隊して我々もやっと二年兵になった。我々は自分達が受けたビンタ教育は絶対にしてはならないと同年兵達と誓う。一週間後いよいよ教育訓練に入る。毎日充実した日が続き、それなりに楽しさがあつた。

一月月位過ぎたある夜、点呼後突然「二年兵全員集合」がかかった。三年兵の奴等だ。初年兵達は何かと皆緊張し我々の動きを見守っている。三年兵達は我々二年兵全員十一人を廊下に並ばせ、

明けを待つ。音も遠くなりホットする。

昭和十六年十二月一日、本隊より命令が入り、俺と小山に小隊本部へ出頭せよと。何のことが分からず保線所を出してくれたトラックに便乗し博山の小隊本部へ出頭する。本部には小隊長と山崎軍曹がおり、今一人同年兵の今井一等兵が俺達を待っていた。三人で到着を申告すると上官二人が笑顔で立上り、小隊長が大声で「今から命令を伝える。陸軍一等兵今井、小山、高橋の三人は十二月一日付にて陸軍上等兵を命じ、併せて第十八教育隊付を命ず」という。一瞬俺は驚いた。初年兵の中で一等兵に進級は一番遅い俺なのになんで一選抜で上等兵になったのか。下命が終わって小隊長が「御目出度うよかったなあ」と言って肩を叩いてくれた。また山崎軍曹も一緒に行くから安心してという。その夜は興奮して良く眠れなかった。

第十八教育隊とは済南の部隊本部にある、翌日小隊長に申告、連絡用のトラックに便乗して済南へ向かう。肩には昨日に変わり三ツ星の上等兵の肩

いきなり往復ビンタを掛ける。制裁の理由は、我々が初年兵に対し甘すぎるというのだが、初年兵の目の前で殴られた我々の面子は……、寢床に入るも悔しくて、今に見ていると自分に言い聞かせやうと眠りにつく。

報復の機会は思ったより早く来た。三日後の深夜に「三年兵全員集合」の声が……。三年兵達はキョトンとした顔付きで「ナンダ、ナンダ」と怒鳴っているが、この呼集は我々同年兵の渡辺が先日の仕返しにやうたと分かり、我々も黙っておれず立ち上がった。だが渡辺は酒に酔って銃に実弾を込め、三年兵を一人一人銃でこずいて起し廊下に並べ立たせ、渡辺一人にまかせておけず、二年兵も全員銃を手に三年兵に向かう。三年兵達はシヤツと袴下姿で震え、オロオロして「止める、止める」と青い顔をして叫ぶばかりである。

我々は冬服に外套を着用しているので寒くないが……。「敬礼」と言う声で振り返ると週番副官の巡察だ。しまった……えらい事になった。副官は「お

前は何をしているのか、もう朝になるぞ」と言う。副官の顔を見ると何時も我々を良くしてくれる大原曹長だ。「もう許してやれ。お前達の気持ちは充分分かる。悪いようにはしないから解散しろ」とその言葉を切つ掛けに周辺を説得し解散、内務班に戻る。

翌日朝、点呼後演習を休み謹慎…。午後より一人一人班長室へ呼ばれ事情を説明させられる。二日後、中隊長室へ呼ばれて出頭する。室には隊長、小隊長、大原曹長、山崎軍曹の四人が渋い顔をして座っている。その前に進み「高橋上等兵お呼びにより参りました」と…。すると山崎班長が「高橋、お前に相談があるのだが、どうだお前航空隊へ行く気はないか。実は隊長方といろいろと相談の結果、お前と渡辺をそのまま隊に置いても将来性が無いので、この際転属した方がお前達のためだと思ふ」と。

どうも俺がこの度の首謀者になっているらしい。ここで弁解してもしようがないと周囲を見ると皆

その数七十二人に及んだ。

数日して鉄舟訓練を受ける。なんで航空兵が鉄舟だか分からないが、帰還船が来るまで毎日のように海の上である。俺は昭和十五年十二月に海を渡り、北支済南の電信第十連隊に入隊し、徐州の野電隊に転属、作戦に参加もし、十六年兵の教育係と勤務中の昭和十七年三月に兵長に進級、僅か一年数カ月にて兵長にまでなり、今内地へ帰る船を待つ身である。振り返って見ても進級の早さに驚くのみである。

昭和十七年四月、帰還船にて広島へ上陸し、駅にて父へ電報を打ち、列車で任地の浜松へ行く。車窓より見た風景が何とも懐かしい。何時間か経って浜松駅に到着、駅前で大休止して父を待つ。二十分位経つと後の方で俺を呼ぶ父の声が聞こえた。一年半ぶりに逢う父の顔、別れた時と変らないう懐かしかった。僅か十五分位の間だったが集合の命令で父と別れ第九十七部隊へと行動する。

部隊は三方ヶ原にあり別名「七教」という。俺

うなずいている。よし俺も男だ俺がかぶれば皆助かると思い、班長に「自分と渡辺だけで済むならば転属を致します」と言い切った。班長は「承知してくれるか、後のことは決して心配するな」と、俺は悔しくて泣けてきた。

隊長達は俺の涙をどう思ったのか翌朝、隊長より航空要員としての転属命令を受けたが、意外なことに併せて陸軍兵長を命ずると進級命令である。そして渡辺と二人は陸軍航空第九十七部隊へ転属と決まる。班長室へ申告に行くとな班長は「転属先は浜松だ」と「内地へ帰れるのだ、頑張れよ」と兵長の肩章を付けてくれた。俺も今までの厚情を謝して退室、翌日申告して集合地の青島兵站へ向い列車に乗った。

ここ済南も苦しい嫌な所で、二度と来るところではないが、去るとなると何か淋しい。内地から一緒だった同年兵の親しい顔が浮かび無性に別れがたい。青島兵站に着き申告して船を待つ。その間に各地より転属者が集まり、何故か士官が多い。

は部隊へ着いたその夜からマラリアの発熱で就寝、七日ばかり寝たつきりだと言う。ふと目を覚ますと枕元に週番腕章を付けた下士勤の兵長が心配そうに覗き込んでいた。「兵長殿、ご気分は」と言っ顔を拭いてくれた。俺は済南を出る時から一回も髭を剃っていないので大分古兵に見られた野戦帰りの恐い兵隊に見られたらしい。

八月一日、下士官志願もしてないのに陸軍伍長に任官、併せて陸軍航空通信学校へ九月十日までに入校の命令が発令された。何んだかおかしいが流れに逆らう事も出来ず入校す。毎日の教科は電信隊で修めているので教官生田目中尉の助手となり毎日を過ごす。

昭和十八年八月頃、集会場の掲示板に意外なものを見た。我々の原隊である電信第十連隊がニューギニアに於いて玉砕の記事だ。事務室へ急行して事情を聞くと、十六年兵の一期の検閲後南方へ移動したらしい。同年兵の顔や温情ある上官達の顔が走馬灯のように目に浮かぶ。集会場へ帰り渡

辺と二人で酒を痛飲、本当に人には運命というものがあるのか、俺や渡辺が転属してなければ同じ南方の土になっていただろう。

昭和十八年九月、卒業演習も済み、卒業の日が近付いたある日、配属先の発表があり、六十人余が南方派遣と決まり、俺や渡辺は学校付として兵庫加古川通信学校開設要員として残留する。がっかりして事務室へ交渉するも、「貴官等は加古川にて少年飛行兵の教育に専念せよ」と申し渡されるのみ。南方行きに決まった者は張り切っているが、九月末、無事卒業式も終わり、確か六、七人の者が任地の加古川へ向かう。

加古川通信学校は元高射砲隊の後とか。加古川へ着き申告すると、俺は本部付きの兵器委員室勤務、渡辺は炊事室勤務となる。既に軍曹となり長剣サーベルを吊る身となる。各隊に配属された者は少飛の生徒を迎える準備で忙しい。やがて日ならずして紅顔の少年達が入校して来て、兵器委員室も忙しくなりのびりしてられない。各隊の兵器

なった。

また四月初め、集会所で北支よりの仲間第三中隊付の杉浦軍曹と会い、今までのことを語り合い野戦へ転属願いを出すことになった。早速、学校副官室へ血書の転属願いを提出した。副官は驚き何が不足だと言う。やがて俺は反対だが校長閣下に申し上げてみると。三日後副官室に呼ばれ、第十八航空通信隊へ行けといわれる。大阪の大正飛行場で編成される同隊に杉浦と二人早速出向した。しかし同隊は召集で寄せ集められた予備、後備ばかり、通信の「つの字」も知らぬ兵や下士ばかり、これで野戦へとはとんでもない。中隊長は俺と杉浦に「教育せい」と言う。全く無理の話だ。

そのうち、中隊が別れて二個中隊が出来、杉浦は第一中隊に残り、俺は第二中隊付教育係に転出し、相変わらず召集兵の教育に専念する。第二中隊長はあの潜行三千里の辻政信大佐の弟政良中尉である。しばらくして奈良の山中に師団司令部の移転が決まり、第二中隊に大正飛行場―奈良山中

係と引渡しに忙しく飛び回る。

毎日そんな日も過ぎ昭和十九年三月頃、少飛の生徒は加古川の地より飛び立って行った。

ある日、集会場に武道大会の掲示が出た。試合は数日後と迫っていて、俺も本部の選手として双手軍刀術に三将として出場することになり毎夜練習に励む。試合は五人抜きで校長閣下に賞賛されたが、それから数日して炊事の渡辺が脱柵にて週番司令に捕まって重謹慎となり取調べを受け、南方へ飛ばされてしまい、数日して会報に台湾沖にて潜水艦にやられ水没と知る。北支よりの戦友また一人欠け気落ちする。委員の関中尉からなぐさめられ中隊へ出て見るかと言われ、その指示に従う。

おりから、特幹の生徒が入校して来たので第十二中隊へ来て見て驚いた、北支で世話になったあの大原曹長が少尉で第一区隊長としてきている。聞けば少尉となりこの学校へ赴任して来た由。俺もその日より第一区隊付として再出発することに

の司令部間に有線通信網構築の指令が出て、俺がその指揮をまかされ、連日小隊を指導の任に当る。そして二、三日中に完成と言う目前に遂に敗戦の日を迎えたのである。

【解説】

体験記執筆者は、昭和十五年十二月一日、北支那派遣電信第十連隊入隊から徐州の野戦電信第二中隊に転属、作戦にも参加する。十六年兵の教育係勤務中の昭和十七年三月に兵長に進級、僅か一年数カ月にて兵長にまでなり、昭和十七年四月、帰還船にて広島へ上陸する。そして八月一日、下士官志願もしてないのに陸軍伍長に任官、九月十日までに陸軍航空通信学校へ入校の命令が発令された。執筆者は「何んだかおかしなが流れに逆らう事も出来ず入校」したという。

ここでは、電信隊の教科は毎日の学校で修めているので、生田目中尉教官の助手となり毎日を過ごす。

その時、当初入隊した電信第十連隊は、昭和十八年八月頃南方へ移動、ニューギニアに於いて玉砕したとの掲示をみて運命を感じる。

次いで昭和十八年九月、卒業の日が近付いたある日、六十人余が南方派遣と決まり、執筆者は兵庫県の加古川通信学校開設要員として残留することとなり、少年飛行兵の教育に専念する。加古川では本部付きの兵器委員室勤務で、既に軍曹となり長剣サーベルを吊る身となる。紅顔の少年達が入校して来て、兵器委員として各隊への兵器の引渡しなどに忙しく飛び回っている昭和十九年三月頃、少飛の生徒は加古川より戦線へ巣立って行った。

おりから、特幹の生徒が入校し、北支からの仲間と第三中隊付の杉浦軍曹と会い、今までのことを語り合い野戦へ転属願いを出す。三日後、今度は大阪の大正飛行場で編成される第十八航空通信隊同隊に行けと言われる。この隊は召集で集められた予備、後備で通信の「つの字」も知らぬ兵

や下士ばかり、これで野戦へという執筆者の希望は叶わず、最終的には奈良の山中に移転が決まった師団司令部の有線通信網構築の指揮をまかされ、小隊を指導しながらの任務中、通信網完成目前に敗戦の日を迎えた、という。

執筆者は、新兵教育などの道を歩みつつも常に野戦への希望を具申ししているが果たされず、何か運命を感じる軍隊生活に終始した感慨を記録している。

特質ある体験としては昭和十六年十月突然の「非常召集」で「第十二軍の通信網構成のため、一部の小隊は便衣にて行動する」と言われ、黒い支那服を着せられた便衣隊が編成される。執筆者はその一員として、味方に冷やかされ、自分たちも苦笑しつつ幾日か行軍したという。